

〔資料〕

沖縄国際大学 沖縄法政研究所

第23回講演会

日時：2009年12月22日(火) 午後2時40分～4時10分

場所：沖縄国際大学13号館3階13-309教室

硫黄島と小笠原をめぐる日米関係

—統治下の沖縄と沖縄返還過程の比較—

ロバート・D・エルドリッチ

(沖縄法政研究所特別研究員・元大阪大学准教授)

〔講演趣旨〕

沖縄の復帰の4年前、硫黄島をはじめ小笠原諸島などの南方諸島は、日本に返還された。奄美群島の返還（1953年）や小笠原諸島の返還（1968年）の何れも、沖縄の返還の前例となり、大きな歴史的な意味をもっている。が、その返還過程は、十分に知られていない。本発表は、拙著の『硫黄島と小笠原をめぐる日米関係』に基づいて、その返還過程を紹介すると共に、沖縄を含む南西諸島と同様な状態に置かれていた南方諸島は何故そもそも占領され、統治されたのかの歴史背景やその比較を紹介する。

○司会（大山盛義専任所員）

皆さんこんにちは。きょうは沖縄国際大学総合研究機構沖縄法政研究所というところがあるのですけれども、そこの第23回講演会です。ロバート・D・エルドリッチ先生に硫黄島と小笠原をめぐる日米関係—統治下の沖縄と沖縄返還過程の比較—というタイトルで講演をお願いいたしました。

エルドリッチ先生は1968年生まれだと41歳。米国のニュージャージーでお生まれになり、バージニア州のリンチバーグ大学を卒業されました。その後、日本の神戸大学で研究を積み、最近まで大阪大学で教鞭をとっていらっしゃいました。現在はアメリカの公務員という身分で沖縄にお住まいですので先生に講演をお願いしたいという次第です。

○ロバート・D・エルドリッチ

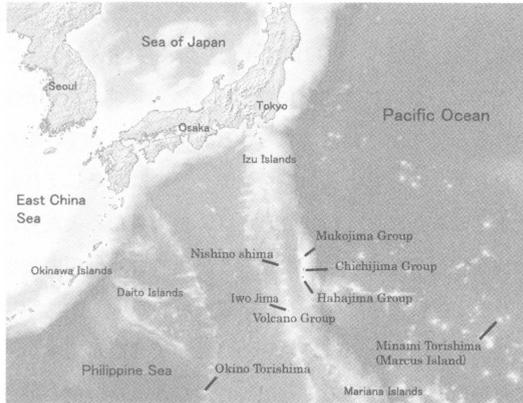
皆さん、こんにちは。先ほど紹介にあずかりました。9月まで大阪大学におりましたけれども、現在、沖縄に住んでおります。海兵隊基地の外交政策部の次長を務めているんですけれども、主に日米両政府の調査員、そして沖縄県、あるいは沖縄の地方自治体との調整の仕事をしているんですけれども、夜とか、週末は自分の研究をやっているの、ある意味では2つの仕事を持って、昼間は公務員、夜は研究者という形でやっています。今年の4月から沖縄法政研究所の特別研究員をする機会をいただきまして、任期はたしか2年半だと思うんですけれども、大いに研究をしたいと思います。研究だけではなく、皆さんに研究成果を伝えたいと思っています。こっちに来てから3カ月になるんですが、研究が思うようになかなか進まなくて、とりあえず今まで、あるいは最近行った研究をまず紹介したいと思っています。将来、皆さんが大学院に進学したり、あるいはもし研究者になりたいければ、私からヒントとしていろんな情報提供したいと思っています。特に研究を設定する際、どのような質問を追求すればいいのか、どのような資料を探せばいいのか、自分自身がどのような貢献ができるのか、そういうヒントを伝えたいと思っています。

きょうの話はここからそんなに遠くないんですけれども、南方諸島の小笠原、父島、母島、そして硫黄島のお話をしたいと思っています。先ほど先生が私の生年月日を触れていました。68年ですが、1968年がちょうどこの小笠原諸島が返還された年でもあるんです。昨年、それを記念に、この本を出しました。きょうのお話はこの本を中心にお話したいと思っています。よろしければ、ちょっと回します。

皆さんの手元にレジユメ4枚があるんですが、そのレジユメと幾つかのスライドを紹介したいと思っていますが、その前に皆さんにお聞きしたいことがあるんですが、小笠原に行かれたことがあるかどうかをお聞きしたい。いかがでしょうか。ないですか。ぜひ一度行ってみてください。行く道ですけれども、まず東京に出なけ

ればならない。東京に行って浜松町というところがあるんですが、そこにうりずんの東京の店がある、那覇のうりずんが東京に店を設けてくれたんです。その近くに竹芝という港があるんですが、そこから大型船に乗って26時間ぐらいかかるんです。次の日に父島の二見港に到着するんですが、天気がいい日は楽しい旅ですが、天気が悪い場合はものすごく気分が悪くなる。私は5回か6回ぐらい行っています。もっとうっている人もいますけれども、私自身の従来の研究は小笠原ではなく沖縄の研究者ですので、こんなに小笠原の研究をするようになるのは、10年前にはとても想像もしなかったんです。

話に入る前に小笠原の写真をお見せしたいと思っていますけれども、場所的にはもうずっと東京から真下、南のほうに伊豆諸島、最終的に父島、母島に行くんですが、人が住んでいるのは、現在3カ所、父島、母島、硫黄島。硫黄島に住んでいるのは住民ではなく、海上自衛隊の方々、あるいはそこに住居する方々です。



これが二見港に入る船からの写真です。



これが父島の役場の前にある、徳之島がどこにあるのか、東京はどこにあるのかという矢印ですが、ほかのところと非常に離れていることがうかがえると思います。

これが父島のいわゆるメインストリート、人がそんなに多くない、車が当然そんなに多くないんですが、非常にのんびりしているところです。船が週1回ぐらい来っています。それで訪問しようと思えば約5日間ぐらい準備、覚悟しないとけない。もし台風とかが来たら、その前後に影響されます。船が来たら、人口がいきなり倍ぐらいふえるんですけども、船もないし、観光客がいなければ非常に静かなところです。人口的に約1,000名から2,000名ぐらいいるんですが、非常におもしろい構造になっているんです。御存じと思うんですけども、もともとこの島を発見したのは、そして住むようになったのはいわゆる欧米系の人たち。人種的に言えば、白人系なる人たちが今でも住んでいます。これは1830年ごろからずっと継続しています。19世紀の後半から日本人、本土、内地の人たちが住むようになって、結婚し合って、住むようになる。後で触れるんですが、戦後欧米系の人たちは島に帰ることができたんですが、日系の方々は68年まで、つまり返還まで島に帰ることは許されなかった。空と島と縁がない人たちが非常に関心を持って住むようになったり、その人たちは新島民という。欧米系島民、旧島民、



新島民、最近若い人たち、海が好きな若い人たちが住むようになって、彼らは新新島民とかいうんですけども、私から見れば非常に魅力的なところ。初めて行ったのは、2000年の夏だったんですが、その前はずっと沖縄と日米関係の研究をしていまして、最初に父島に行ったとき、



ああ寂しいところだなと思ったんですけども、それが自分自身の先入観だったと思う。あまり魅力を探そうとしなかったんですけども、その後2007年、2008年、2005年だったかな、行ったんですけども、だんだんその魅力を感じるようになって、後で触れるんですが、今後とも小笠原関係の研究を継続したいと思っています。

これは山のほうから、さっきお話ししました二見港を見るところです。建物には最近建てたものもあれば、米海軍の統治時代からのものもあるんです。



これが山から見る夕日です。非常にきれいなところです。ちょうど下に見える船ですけども、例えばホエールウォッチングとか、ドルフィンウォッチング、あるいはダイビングから戻ってきている小さい船です。



この銅像が山の道にあるんですけども、この人が小笠原の復帰返還運動に非常に貢献した福田篤泰先生という方です。彼は立川市選出の代議士ですけども、も

ともと外務省の人ですが、たまたま彼の立川市に島から引き上げられた島民が住むようになったんです。その彼の選挙区にその多くの方々が住んだために、彼の要望、希望を聞いて活動するようになったんです。ですので、この人は小笠原返還の父と呼んでもおかしくない。そこでその銅像があります。沖縄で言えば屋良朝苗先生とか、昔の学長、大浜信泉先生がそのような存在だったんですけども、小笠原で言えばこの福田先生が一番中心的だったんです。この銅像が建っているところ



はちょっと残念ながらあまりきれいに整備されていない。雑草、草がめちゃくちゃな状態で、しかも今住んでいる方々がこの人の貢献はあまり知らないのは非常に残念。私の本には福田先生の活動をかなり紹介しています。そこで特に学生さんに申し上げたいんですけども、やはり人物の研究が極めておもしろい。よく私は政治学分野ですが、組織とか、制度とか、政策の議論が多いんですが、最終的に組織に入っているのは、あるいはその政策をつくっているのは人です。ですので、その人の魅力、あるいはその限界を調べるのはとても楽しい作業です。きりがない。その人とその人の人脈、そのつながりがどのように政策に影響するのかがおもしろくてたまらないぐらい。ちょうど私の本が書き終えたころ、これを出版したのは昨年8月ですが、すぐ福田先生、御本人は亡くなっていたんですけども、奥様に送ったんです。大方90何歳の方だったんですけども、その1カ月後亡くなったんです。長男からハガキをいただいたんですけども、こんなに主人のことが紹介されていることは非常にうれしかったということだったんです。

これが父島にある核弾、核兵器の弾が保管されていた場所と



言われているところです。よく現在、密約がどうのこうの話ですけれども、実は小笠原は沖縄返還の大きな前例となっております。核、密約ですけれども、これがあまり現在小笠原の文脈があまり議論されていないんですが、結構どの方式で返還するのか小笠原は非常に政策決定者たちにとっては大きな参考、前例になった。父島が結局、地上戦、硫黄島のように地上戦は体験していないんですが、相当の要塞があったんです。その要塞がそのまま残っている。占領を受けたのは、45年の秋から46年の春まで。そのとき特に武器を中心に廃棄したり、破壊していったんですが、あまりにも施設が多かったからすべては壊せなかった。これは私の仮説ですけれども、硫黄島が相当な犠牲者が出たんですが、もし父島に上陸しようと思えば、かなりの犠牲者が出た。

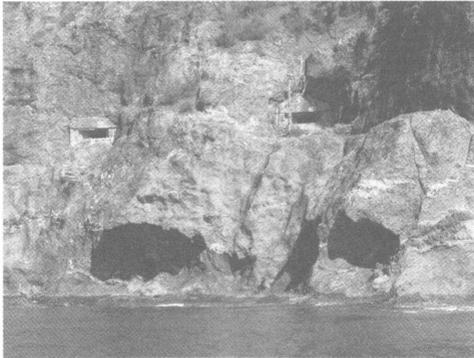


これが戦時中のお酒と水のビンがそのまま山のほうに残っている。



これが要塞の一部、これは海からもし上陸しようと思えば、ここからやられるんです。ほぼ上陸不可能な島になっていたんです。

ここからここにも入ったり、あっちこっちにトンネルのほうにもぐっていったんですけども、怖くて、案内する人がいたんですけども、私は暗いところがあまり好きじゃないので、非常にドキドキしていたんです。



これが6年前の写真、髪があった時代、ちょっと太っていた時代ですけども、これは硫黄島、ここから上陸したところなんです。普段、いわゆる文民、民間の人は行けないんですけども、このときがたまたまいわゆる合同慰霊祭のときでした。日本からは硫黄島協会の方々、OBの方々、あるいは遺族の方々、アメリカからはそこで戦っていた今80歳のOBの人たち、あるいはその家族がアメリカからグアム経由で来る。私は軍歴がないんですけども、海兵隊と長い間付き合いがあって、特別に一緒に行くことができたんです。その後2007年に行って、来年も2月ごろにまた行くことになっています。来年行くときは、現地におられる自衛隊の方々の前で硫黄島の歴史を紹介したいと思っています。



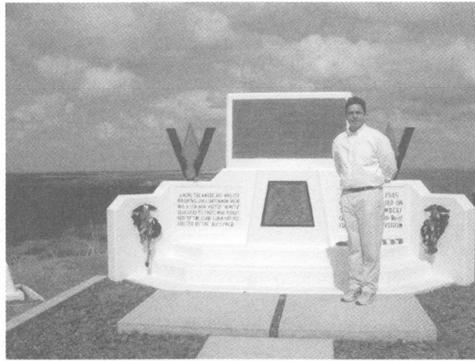
これが摺鉢、山から見た上陸するところ。だからものすごく撃ちやすいところだったんです。その奥にあるのは今の飛行場。



これが摺鉢から見たちょっと北のほうにあるんですが、今の写真は逆に南のほうを向かっているんですが、これが上陸した部隊の1つ、第5海兵師団ですけれども、のお墓、お家。



これは摺鉢から見た記念碑、これが返還交渉で非常に問題になっていた。結局、星条旗があったんですけども、返還されるところに米国の国旗を掲揚するのはどうかという問題があったんです。当時の佐藤総理の内閣に三木武夫という外務大臣がいたんですけども、彼はいわゆる星条旗が残るのは猛烈に反対していた。結局、すでにあった記念碑の上に星条旗みたいな銅像をつくったんです。これは実は海兵隊にとっても別に悪くない話、つまり管理、維持がすごく大変なんです。もし星条



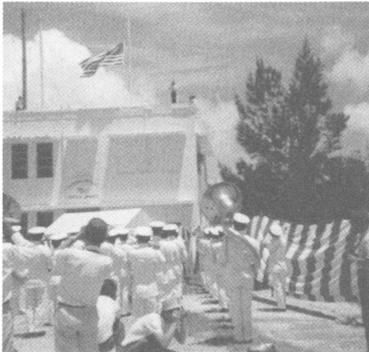
旗だったらすぐ風でやられるから、こっちのほうがずっと丈夫だったんです。何人かの日本人の研究者が大きく誤解しているのは、Vが勝利のV、ピクトリーのVというふうになんかの本には書かれているんですが、これが想像が働きすぎたみたい、それにはない。どういう意味かという、これが第5師団のマークである。Vの意味ではない。もともとの姿がこういうものだったんです。さっき申し上げたように、星条旗という旗が出るのはどうかということで、そこからブロンズで、銅でできた旗があったけれども、それを立てた翌日かな、台風でやられた。当時の外務省のある人が、今も生きています、この間まで国連大使を務めていた佐藤行雄さんに取材したけれども、彼が「それは神風だった」とエピソードを語ったんです。



最終的に、こういう形になったんです。ここから、これは47年に建てた基盤、ベース、こういう形になって、最終的にこういう形になった。



最後の写真ですけれども、これが父島の米海軍の司令部の屋根にあった星条旗が下ろされて、日の丸が掲揚する瞬間だったんです。という小笠原、硫黄島の写真ですけれども、なぜそもそもこれに関心があったかという、自分自身の研究背景を簡単に紹介したいと思っています。先ほどもともと沖縄中心の研究、あるいは沖縄と日米関係の研究をやっていたんですけれども、お話があったように、私は日本に参りましたのは、1990年の夏だったんです。最初は2年間、JETプログラムという中学校の英語の教師を務めていて、その後、国務省、日本で言えば外務省に入る



つもりだったんですけども、その後、あるいはその前に日本語の勉強のために大阪のほうの学校に行っただけです。大阪で日本語ができるかどうか疑問する人もいるかもしれないんですが、関西弁が残らなかった、標準語で勉強していたんですが。その後、国務省に入る前に大学院に行ったらいいんじゃないかと思って、アメリカ大学院も考えたが、結局神戸大学に入りました。私の指導教官が非常にすばらしい人、本当の意味での先生である。いろんなことを教えてくれたんです。日本だけでなく、自分の国について、いっぱい教えてくれて、彼のもとで戦後、日本外交を見ていたんですけども、ちょうど修士論文を書き終えようとしたときに、沖縄で少女暴行事件があって、そこで当時のSACO（沖縄に関する特別行動委員会）という委員会が設けられて、1年以内にいわゆる負担の削減の議論が始まったんですが、たった1年間で戦後沖縄を理解できるかという疑問があったんです。そこでもし博士課程に入ったら、今度は逆に日米関係と沖縄ではなく、沖縄から見た戦後の日米関係を研究することにしました。最終的にその三、四年後にまとめた博士論文が「対日講話条約と沖縄」について書きました。日本語版はこの図書館に入っているんですが、「沖縄問題の起原」という題名だったんです。それが99年にまとめて、2001年に英語で出して、2003年に日本語版を出したんですが、博士論文そのものを終えたときに、次書くつもりだったのは、沖縄返還を中心に見たかった。つまり52年から72年。それをやろうとしたときに2つのほかの返還過程を見る必要があるのではないかという疑問をもっていったんです。その2つというのは、奄美群島の返還、そして小笠原の返還。奄美が御存じのように1953年に返還されて、小笠原が68年でですけども、順番的に奄美を見て、小笠原見て、再び沖縄の研究に戻れるということであったんです。この3つの地域がいわゆる日米と同盟下の領土問題、普段、領土問題は関係がよくない国々の間の紛争というふうな議論されていると思う。例えば日露、日中、日韓などなどということですが、私は同盟国がどのように複雑な問題を、同盟の管理をしながら、住民、県民、島民、国民、あるいは政治家等の要望をどのように対応するのか。アメリカ政府として何が国益なのか、つまり短期的な国益、中期的な国益、長期的な国益を分けて議論すべきではないかと疑問を持って、そして国務省、そして軍のほう、国防省の意思決定をどのように行っているのかを見ることにしました。奄美返還のほうの2003年にまとめて出して、さっき言いま

したように、小笠原のほうも昨年出しました。

もう1つの関心が硫黄島についてで、後で触れるんですけども、最初小笠原をやろうとしたときは、同じように戦後だけを見るつもりだったんですけども、もともとそこに駐留するようになったのは硫黄島戦から来ているので、その硫黄島戦がそもそもなぜあったのか、どの意味を持つのかを見る必要があると思ったんです。あと海兵隊との付き合いが長いので、海兵隊にとって硫黄島がどういうものなのか、関心を持つようになったのか、あとさっき言いましたように、多くの場合、外交士が政府を中心にすることがあるんですけども、政府に問題意識を持たせたり、あるいは問題提起するのはやっぱり人、個人、あるいは団体、あるいは軍の協会、さまざまなアクター、主体があるので、アクターたちの動きも見ることは非常に重要と思う。具体的な例を挙げますと、奄美返還の場合、日本政府がアメリカに対しても要求してもなかなか簡単に返還しないんですけども、つまり日本政府は合意問題に意識がある。当時もそうだし、現在もそうですが、非常に弱くて、あまり国際安全保障に貢献しない日本がどうやって土地の返還を求めることは、特に冷戦時代に非常に日米間の摩擦になっていた。つまり日本政府から言ってもあまり正当性がなかったんです。しかし、奄美の復帰運動の方々、あるいは本土におられる奄美出身の方々が行動することによって、日本政府を動かしただけでなく、日本政府がその要望、要求をアメリカ政府に伝えていった。だからある意味では復帰運動がなければ日本政府はとても説得力が持てなかったと思う。そこで自分の研究においては、こういった組織、人の動きをかなり注目しています。

そこでちょっと簡単にそれぞれの比較をしたいと思っています。まず奄美返還のほうがクリスマスプレゼントとして行ったんです。本当はもっと複雑な理由だったんですけども、単なるクリスマスのためではなかったんですけど、一応たまたま日付が25日だったので。特に沖縄との比較で言えば、まず奄美は地上戦を体験していない。したがって、そういった辛い経験がなかった。それによってそんなに強烈なイデオロギー、平和主義が働かなかったと思う。しかし、単なる民族的に、政治的に、行政的に再び鹿児島に戻りたい、本土に戻りたいという、いい意味で純粋な希望があったんです。あと軍事的には奄美がそんなに重要ではなかったので、軍事プレゼントが少ない。ただ人口が比較的多い。約22万人が住んでいた。22万人がい

るにもかかわらず軍事施設がほとんどないので、なぜ施政権まで持つ必要があるかということがアメリカ政府の中でも議論になっていたんです。もう1つ奄美がすばらしいと思うのは、ものすごくすばらしい人材がいたんです。相当の学力のある人たち、活発で行動力のある、人脈が広くて、例えば地元の方々と内地、東京の人たちとの連携が非常に強い。これは本当かどうかかわからないんですが、ある何人かの方々から聞いたんですけれども、奄美が鹿児島県の一部ですから、奄美から鹿児島市で生活しようと思えば、どうしても差別を受ける。どうせ差別を受けるなら東京あるいは関西で頑張りましょうということで、鹿児島抜きに東京、関西に行って、そこで拠点を持つようになったので、相当の活動をするようになった。それで著名な学者たちとか、あるいは最高裁判官、政治家のすばらしい人材がいたんです。あと極めて重要なのは、鹿児島県の一部である奄美群島が不自然に行政的に分離、分割された。当時の知事、重成という方がやっぱり不満を持って、本土から奄美を応援していたんです。退却というより自分の問題として活動していた。そういった協力、応援していたんです。沖縄にはそういうことはなかった。つまり沖縄は県そのものが統治下されていたので、そういった本土のどこかの県の一部ではない。したがって、そういう「県の一部としての」行政的な応援がなかなか得られなかった。

小笠原と硫黄島の返還ですけれども、父島と母島では地上戦がなかったけれども、御存じのように硫黄島では激しい戦闘があった。ここで特に米軍にとっては痛かった。日本兵の約2万2,000人のうち、ほぼ95%が全滅。つまり5%以下しか残れなかったんですけれども、米軍には相当な犠牲者が出た。これは初めて死者、負傷者がこんなに出た。その小笠原返還の過程には米国にとって非常に感情的な問題になったんです。そのときまで日米交渉が、むしろ日本は感情的な問題が多かったんです。今回、例えばさきの摺鉢の記念碑は非常に象徴的なものであったんです。したがって、なかなか手を離す気持ちはなかった、これは死者が多かったから。戦時中、つまり1944年に父島、母島、硫黄島におられた7,000名の島民が引き上げられていったんです、日本軍によって。戦後、さっき言いましたけれども、日系の方々は帰ることができなかったんです。しかし、欧米系の島民は内地で差別を受けていたので、人種差別を受けていたので、島に帰ることができたんです。約130名だったんです。小笠原の統治は海軍による。教育は英語で行っていた。人数が少ないから、それは

できたんですが、いずれ復帰するので、切りかえが非常に大変。それが英語の教育をずっと受けていた島民、つまり今で言えば50年代、例えば60年代、当時10代の人たちが、現在50歳、50歳の人たちが相当いる、島がいわゆる復帰してから日本の一部に再びなったときは、すべてが日本語の世界になっているので、かなり苦労だったんです。これが米海軍の政策の失敗だったと思う。なぜそれをやったかということ、恐らくこれは二度と日本のものにならないだろうという見方だったんです。それに対して、国務省はずっと、これは南方諸島と南西諸島は日本のものです。いずれ返還することになっているという異なる政策をとっていた。

ちなみに、硫黄島には海軍ではなく空軍が統治というか、占領していたんですが、住民が、島民がいなくて、これはずっとわりあい自由に使えた島だったんです。軍事プレゼンツは比較的少ない。硫黄島では空軍、父島では海軍、特に潜水艦の基地として機能していた。帰島促進連盟という組織があったんですが、その運動は非常に活発であったけれども、人が少なかった。さっき言いました7,000名しかいなくて、さっき紹介しました福田先生以外はそんなに人脈がなかった。これが奄美、そして沖縄との大きな違いだったと思う。東京都の一部である小笠原諸島が、それまでは知事の協力、応援があったんですが、50年代にはそんなに応援してもらったという感じはしていない、資料で見ている限り。60年代になるとかなりそういった要請が行うようになったんですけれども、そのときはそんなに活発ではなかった。当時、60年代は美濃部亮吉が知事だったんです。小笠原が沖縄のように非常に複雑な問題がたくさんあったんです。もともとの要望は島が講話条約の際には再び日本の一部になることだったんです。つまり返還することだったんですが、それが残念ながら実現できなかったんです。そこで島に帰らせてくれという帰島問題があったんです。これが長年議論していたんですが、結局、もし日系、要するに日本人が島に帰ったら、これは50年代の話ですが、もし帰ったら沖縄のように基地との摩擦が激しくなる。50年代半ばの沖縄は島ぐるみ闘争とか、そういった激しい運動があったんです。米、海軍は国務省に対して、あるいは日本政府に対して、沖縄を示して同じ状況になる。したがって、日本人が島に帰るのは極めて政治的な問題になるので、一切許可しないという方針をとっていたんです。そのかわり補償、賠償の問題が出た。しかし、これはわりあい簡単ですが、しかも、これが講話条約の直後にこ

の対策、提案が出ていたんですけれども、結局、島に帰る運動、帰島促進連盟にはいろいろな利害関係があったんです。例えば農業で生活する人、あるいは船で例えば輸送、船で貨物を運ぶ、あるいはフィッシングで、漁業で生活する人、あるいは土地を持つことで生活が成り立った人、いろいろな利害関係があった。結局、その小さい連盟がさらに4つの小さい、利害をめぐる組織になってしまったんです。結局、その求心力がなくなる。もうばらばらになって、組織全体も完全にストップになったんです。結局、本来みんな生活に非常に苦しんでいるはずが、結局お金が分配をめぐって数年間もめていたんです。分裂された組織は組織と言えないので、福田先生が再びみんなを集めて、結局、小笠原協会、今でも存在している小笠原協会をこの4つの組織から統合させて、再び活動するようになったんです。すぐやろうとしたのがお墓参り、墓参り問題だった。これが65年に実現できて、あと特に硫黄島では遺骨収集問題もあったんです。少しずつそれぞれの課題を外交の場で取り上げて解決したり、あるいは先送りするんですが、結局、60年代の終わりごろに返還がやっぱり再び大きな問題になる。そこで小笠原返還と沖縄返還がかなり日米の場で議論するようになったんです。67年に佐藤総理がワシントンを訪問して、小笠原の即時の返還と沖縄の将来の返還を要望する。それ実現できるんですが、小笠原の返還は結局あまり注目されなかった。やはり沖縄のほうがみんな注目していった。結局、小笠原返還はどうせ時間稼ぎの措置だったということだったんですけれども、私はもっと深い意味があって、研究することに着目した。レジュメには詳しく書いてるんですが、そういうアプローチで取り組んでいた。

あとは沖縄返還との文脈、どの点が前章、モデルになったのか、そして何が違うのかをちょっと見ていただきたい。沖縄返還が御存じのように、72年にできたんですが、激しい地上戦、住民の1人、または3人に1人が亡くなる。巨大な軍事プレゼンツがあった。今でも人口的に島民、住民が多かった。60万人から80万人。当時、行政あるいは教育は幸いに日本語で行われていた。さっき言いましたように、他の県の一部ではないため、本土の県の応援はもらえなかったんですが、もちろん別の形で協力は得ていたんです。結局、内閣総理府が中心になって52年から、いわゆる沖縄問題を取り組んでいた。奄美のようにすばらしい人材が沖縄の中でおられて、あるいは沖縄で活躍していた。その人脈を大いに生かしていた。残念ながら私は講

話条約の際に、沖縄が日本の一部として名目上だけでなく、事実上残すべきというふうには沖縄問題の起原に明確に書いているんですが、そうならなかった。さらに50年代に復帰運動が弾圧を受けて、60年から本格的に活動が再開しましたけれども、最終的に実現ができるようになった。それぞれの返還過程は共通するところもあれば、全く異なるところもあります。

小笠原の話にちょっと戻りますと、先ほど回覧していただいた本には、約10章から構成されています。最初に何をしゃべろうと思ったかという、いわゆるリサーチ・クエスション、そもそも米国が小笠原諸島をなぜ占領するようになったのか、その施政するようになったのかなどの質問があったんですけども、それを調べれば調べるほど、やっぱり戦後だけではなく、戦前のことも見る人があった。そこでいろいろ調べてみたんですけども、小笠原関係の研究がそんなに多くない。多くの場合、かなり専門的な話、例えば小笠原貞任によって、貞頼かな、によって発見されたりとか、全くおもしろい話ですけども事実ではないとか、いろんな解釈、諸説があるんですけども、そんなにまじめな研究がなくて、そのうち戦後は非常に少ない。戦前関係のものが多。戦前というともう19世紀半ばまでばかり。あと戦後の研究に関して言えば、欧米系の住民、島民に関する言及が多い。つまり日本では非常に珍しい状態、人種的、民族的に。特に海外からの研究者が非常におもしろく、言語、言葉の研究とか、あるいは日本国籍でありながら生活は英語でやっている人たちが非常におもしろいということで、60年代、70年代に多くの研究者が取材はしていた。小笠原は非常に遠いところですので、船でしか行けないので、飛行機はない、飛行場がないので、いろんなイメージがある。したがって、非常に不思議なところと思われている。もう少し真相というか、見る人があると思ってより広く研究するようになった。それは特に学生たちはゼミ、あるいは卒論、あるいは将来大学院において設問が非常に重要だけれども、柔軟的にそれを見てください。つまり仮説も途中ででもしかすると間違っていることに気づく。無理に仮説に合わせる議論はやめる必要がある。もっと柔軟的に研究したり、調査したりしたらいいと思います。結局、本の量が倍ぐらいふえて、戦前を見ることにした。結局、戦前というともう16世紀にさかのぼって調べた。発見から人が住むようになって、または日本の領土の一部になるまでを詳細に調べて、あと第二次世界大戦の硫黄島、第二次

世界大戦の小笠原諸島のことを見て、その後戦後のほうを見ていた。

資料ですけれども、これも特に学生たちにぜひしてほしいのは、二次研究、つまりだれかが研究した、あるいは新聞の方が書いてあるのはとても参考になると思うんですが、その方がどの資料を使ったのかを確認する必要がある。本の読み方がいろいろなやり方があると思うんですが、最初から目次からスタートする人もいれば、索引からスタートする人もいます。あるいは参考文献からスタートする。私はどちらかといえば参考文献からスタートする。つまり参考文献がしっかりすれば、もしかするとこの本がしっかりしているかもという期待はある。あと論文の構成が目次で紹介されています。まあ問題によるんですけれども、なるべく国際比較ができるようなアプローチが必要。例えばある問題について、日本人の研究者だけではなく、海外の研究者がこの問題意識についてどう思っているのか、どのような分析をしているのか、日英とか、日西とか、日中とか、いろんな言語は使えると思うんですが、比較がとても大切。一次資料が非常に重要。私は現場主義の人間ですので、だから阪大をやめて海兵隊の中で仕事をしてみた。机でわかるものと、実務をしながら感じる、見えることがやっぱり全然違うので、超現場主義の人間です。一次資料ですけれども、沖縄ではすばらしい資料館がある。それは県公文書館ですが、もちろん皆さんの研究関心によって、そろえている資料が異なるんですけれども、この沖縄国際大学の図書館がすばらしい。非常に感銘を受けています。大体沖縄にある各大学の図書館が非常に充実している。特に沖縄研究に関しては。例えば個人文書を使ったり、あるいは実際にインタビューすることも非常に重要。インタビューは、インタビューだけでなく、例えば日記、手紙などのもの、オーラルヒストリーとか、もちろんすべてが事実であることは100%保証できないんですが、何もなければいいと思う。将来、行政側の資料が出たら、それも比較して使えばいいと思うんですが、この日記、オーラルヒストリー、手紙、インタビューを大いに生かしてください。幸いに小笠原研究ではなかなかいい資料をあっちこっちにあって、海軍の作戦資料館、これはワシントンにあるんですけれども、あるいはワシントンの近くにある公文書館、あるいは大統領図書館、日本では私は総理大臣図書館を提案しているんですが、なかなかそれが注目されなくて非常に寂しいんですけれども、将来それができるように期待しています。外務省資料館、海兵隊、歴史軍、各団体の

資料とか多く使っていた。あと現地調査を大いにやっていました。

本の中身、どのような発見、あるいは議論があったのか、各章、レジュメには紹介しているんですけども、特に申し上げたいのは、日本政府の粘り強い交渉が結局、これが実現できたんですけども、と同時に、米政府はより大きな判断をしていた。つまり小笠原はそれほど戦略的重要ではない。つまり日米関係を悪化させるほど重要ではないということで、返還の議論に応じていた。特に何が戦略的に変わったかという、大体64年まで核を置いていたんです。それが新しい潜水艦ポラリスに切りかえることによって、わざわざ小笠原の父島に、あるいは硫黄島に置く必要はないだろうという議論になって、結局、撤去された核弾は恐らく再び配備しないだろうということで、施政権そのものを持つ必要がないという議論になっていた。日米の議論がその後展開して、三木外省が小笠原の重要性と沖縄の重要性はやっぱり違いがあるんじゃないかという交渉を試みたら、わりあい政府がそれを認めて68年の返還が実現できた。返還協定そのものが68年4月に調印されたんですが、その後6月26日に、つまりたった11週間で返還が実現できたわけです。これが島民にとっては非常にショックだった。つまりそのときまで英語で教育を受けて、経済が完全に海軍とリンクしていた状態。などなどの心配があったんですけども、これはまさに69年から72年の沖縄の心配とも似ているのではないかと思います。そういう心配、懸念をどのように対応するのか、今度アメリカ政府が島民と日本政府の間にかけ橋になっていった。歴史的な意義ですけども、領土を平和的に返還することが歴史にはなかなか見られないことです。その意味では非常に評価できるのではないかと思います。

自分自身、今後の研究ですけども、さっき申し上げたんですが、小笠原諸島関係で言えば、いろんな関心があるので、これは自分自身、または小笠原に関心のある次世代の方々に提案したいと思うんですが、まず戦前誌、特に19世紀終わりごろ、そして20世紀前半のほうはまだ資料的には一次資料を使って、そんなに分析がないんです。大体幕末から明治にかけてだけがかかなり詳しく書かれているんですが、70年代、1670年代から、あるいは80年代からはちょっと少ない。もし何か太平洋地域に関心があれば、この小笠原が非常に重要な拠点になる。移民、土地領との関係で、内地と太平洋地域との船が必ず父島に寄ったので、そういうような歴史がまだ

まだ十分に調べていない。さっき人物誌ですけれども、小笠原関係の人たちがやっぱりまだまだ調べるべき人もたくさんいると思う。海軍時代ですが、さっき言いました作戦資料館は約6つぐらいの箱があって、私はその箱の資料を全部見たんですが、海軍による統治を中心に研究していない、外交の文脈の統治しか見ていない。ですので占領のあり方、あるいは統治のあり方に関心があれば、ぜひその資料を使ってください。復帰後から現在に至るまでのいわゆる研究がそんなにない。特に行政的に小笠原が東京都の一部に再びなるのは相当の作業があった。振興策、法の整備とか、そういったものがあつた。教育関係とか。もし将来、行政に関心のある学生がおられましたら、それも一つ比較になるかもしれない。特にいわゆる離島の振興、教育問題、あと硫黄島戦について研究が多いんですが、歴史としての硫黄島というものがそんなにない。そういうふうに関心があるのではないかと思う。自分自身ですけれども、栗林中将の参謀を務めていた堀江さんが2003年まで生きていた。彼の本、「闘魂 硫黄島戦」というものを私は英訳している。それを来年中、アメリカで出版する予定です。一緒に作業しているのは堀江さんの御遺族ですが、硫黄島戦に参戦した米海兵隊の82歳のおじいさんと一緒にやっている。こういった共同作業をするのはとてもおもしろい。もう1つやろうと思っているのは、「幕末の小笠原」という本を書いた田中弘之先生、ダニエル・ロングという小笠原研究の第一人者と私が幕末の関係者が初めて小笠原の欧米系の島民と接触するやりとりがある。これは「小笠原島住民対話書」というものがある。これを英訳して、接触をもう一回再構成、最実現しようと思っている。例えば数年前のペリーの来日のいろんな本があるんですが、それ以外、外国人と当時の日本人との接触に関する記述がそんなにない。これをひとつ訳してみたいと思っています。あと「戦時中の母島」もおもしろいと思っている。小笠原高等学校の社会学の先生がこの研究に非常に関心があつて、当時の島民の取材をしたり、あるいはその関係の資料を集めてきたり、私は米軍からの資料を提供しようと思っている。もう1人、さきの要塞を案内してくれたガイドさんが日本側の軍備などの話、戦略の話の資料を提供する。一緒にその本を書こうと思っている。例えば現地の高校生の方々と米海軍時代の聞き取り調査、聞き書きかな、調査もやろうということで、これは授業の一環として総合学習。あともう1つ関心があるのは、外務省の資料館の浜井研究員と一緒に企画しているんで

すが、日米合同慰霊祭が1985年に初めてできた。その合同慰霊祭に至るまでのやりとり、そして硫黄島で再開する日米両軍の関係者の話は何だったのかという日米関係の中のエピソードを書きたいと思っている。沖縄返還との関係では、さつきちょっと触れていたように山ほどの比較はできると思う。統治下のあり方、復帰運動の比較、軍事戦略上の意味などの比較はできる。ヒストリーだけです、全部はできない。次の世代の皆さんに非常に期待しています。ちょっと長くなったんですけども、もし御質問のありますと、ぜひおっしゃってください。もし個別にお聞きしたいなら、これは連絡先ですので、ぜひ連絡してください。

『質疑応答』

○司会

エルドリッチ先生、ありがとうございました。本を回してもらったように、この本をもとにして90分弱でしゃべってくださいというのは非常に無理な話で、後で履歴のほうを皆さんにお配りしましたが、エルドリッチ先生ごらんのように、専門分野、研究関心幅広いので、きょうの問題に限らず、何か先生に御質問等があればぜひお願いします。

司会の方から一つ確認ですが、小笠原の時間稼ぎというのは、これは沖縄返還を後に回すということと違うんですか。

○ロバート・D・エルドリッチ

そうです。そういう意味です。

○司会

はい、わかりました。そういうことで、質問のある方、挙手をなされてお願いいたします。

○質問者（法学部学生）

もし硫黄島と父島が返還されていなかったら、現在ではどうなっていたと思いますか。

○ロバート・D・エルドリッチ

とてもいい質問です。実は67年の秋から68年にかけて米軍の中では当然硫黄島の返還に猛烈に反対する人もいた。理由は2つ、1つは感情的なところ、もう1つは

戦略上、やっぱり飛行場をどうしても大事な財産、資産ですので、持ち続けたかったんです。そこに分離返還論がありました。一部の議員たちもそれに賛同していたけれども、当時のジョンソン大使が強く日本側の要望を伝えたり、議会を説得していた。幸いに分離返還ではなかった、まとめて行ったんですが、仮に返還されなかったら、そうですね、正直ちょっと考えられないぐらい、あるいは今まで考えてこなかった。というのは、もう66年ごろから沖縄を含めて小笠原はやっぱり返還しなければならないというアメリカ政府の中の考え方も支配的になっていた。返還するかしないかではなく、いつどんな形で返還するのか、もうかなり共通の考え方だったんです。問題が当時ベトナム戦争も最中だったし、核戦略の結論が出るまでちょっと時間がかかったし、日本政府がいつどの形で本気で要請するのか、つまりむしろ日本政府次第だった面もある。当時の大使、ライシャワー大使、これはジョンソン大使の前任者ですけれども、彼が日本政府にイライラしていた。つまりそろそろ返還できるけれども、なぜ日本政府が積極的に要求しないのかという気持ちになっていた。だから当時の佐藤総理が「待ちの政治」の人だったと言われていた。「まち」は都市のまちではなく、ゆっくりした、決断が遅い、決断がゆっくりという待ち、待つ政治家だったので非常に慎重に決断していた。だからちょっと正直、ご質問の「i f」のことは今まで考えていなかった。その理由はいずれ返還することにはほぼ確実になっていた。あとタイミング的にはもし交渉が下手に行った場合、ちょっといろいろ摩擦があったんですけども、若干延びていたのは延びていたと思うんですが、沖縄の返還は72年以降はちょっと返還が考えられないのではないかなと思う。つまり少なくとも69年の秋、佐藤とニクソンの会談で72年、核抜き、本土並みの返還方式がかなり確実になっていた。日米両政府が心配したのは、70年に日米安全保障条約がちょうど10周年を迎える。最初の10年間は、もし問題なく10年までもつんですけども、それ以降、その1年に実際に通告する解消できる。果たして延期するのかどうかという心配が日米両政府にあった、70年には。ですので、いわゆる沖縄問題、返還問題をどうしても70年までに決着したかった。もし硫黄島がまだ返還されなければ、結局、同じ問題が持ち越して、日米の摩擦の点になった。ですので、どうしても60年代中に決着、あるいは方針を決着したかったということは言えるかなと思う。ちょっと答えになっていない部分があるんですが、申しわけない。いい

質問でした。ありがとうございます。

●質問者（黒柳保則所員）

有意義なお話をいただいて感謝いたしております。

3つの返還ということで、奄美返還、小笠原返還、そして沖縄返還についてお話をさせていただきました。

奄美であれば鹿児島県、小笠原であれば東京都ということで、それぞれ県や都がセパレートされていることから、母県というんですか、そういうところが手助けをしてくれたという話があります。

それに対して沖縄は、ひとつのまとまりですので、そういうことは望めませんでした。

さきほど鹿児島県の重成知事のお話をなされたわけですが、そういう母県の存在は、あるいは足を引っ張る要因にもなっています。

例えば保岡興治の父親の保岡武久、例の保徳戦争の一世代前なんですけど、そもそも内務官僚でその頃は鹿児島県の副知事をしていました。彼はもともと島ンチュなんですけども、奄美の返還運動について、余計なことをするなということで、足を引っ張ったという話も聞いています。

運動というところでいえば、指導者層がひとつ切り口なんですけど、民衆というんでしょうか、そういう草の根のこともやはりあわせて考えなければならないと思います。

もちろん先生も考えておられるでしょうけど、今日は学生さんも参加していますので、ひとつ付け加えておきたいのです。

それから、返還運動ということでは、運動間の連携という問題があります。

奄美返還運動と沖縄返還運動は、奄美が1953年に日本へ返還されてしまうので重なる期間が短いということもあってか、連携が弱かったと言わざるを得ません。

あと小笠原ですね。ライシャワーがちょうどそのころ日本大使をしていたと思うのですが、日本側がもっとうまく外交上の交渉すればいいものをというように、じれったい感じを持っていたということがあったようです。

日本側の共同戦線の構築というんでしょうか。私の不勉強なところもあるのですが、南とはいえ、沖縄・奄美・小笠原は条件が違ってきます。共通点に乏しいとし

でも、やはり切り離されてしまったということであれば、そこを乗り越えようと立ちになるような人、3者のかけ橋になるような人がいなかったのかという感を抱かざるを得ません。そのあたりの分析もこんご必要になってくると思います。

それから、人物研究の重要性というご指摘は、私も全くそのとおりだと思います。返還過程の研究は、さまざまな人物が絡んでいて重要な役割を果たしてはいるながらも、制度から語られてしまうところがありますので。

ライフヒストリーから掘り起こして一つの歴史的な事柄を考えるというのは、有効かつ重要な手法だと思います。

質問というより感想になってしまいましたが、蛇足ながら発言させて頂きました。有難うございました。

○ロバート・D・エルドリッチ

ありがとうございました。いろんな示唆、ありがとうございました。一つライシャワーの話が出ていたんですけども、彼が大使を辞めて66年に、約5年ぐらい務めて、69年に大浜信泉先生を中心に京都で「京都會議」というものが開催された。そのとき、今で言えばチュラクトウ外交をやっていたんです。つまり学者、政府に近い人たち、公務員ではない人たちを行かして、日米両国がお互いの考え方を確認し合ったりしていた。沖縄から4名の学者が出席してお話をされていたんですけども、1月に行って、その1月から3月にかけて会合を主催した上の母体が沖縄問題懇談会が報告書をまとめて、佐藤総理に提出したんですけども、これは先ほど言いました返還の方式、72年まで核抜き、本土並みですけども、そういう学者同士、あるいは政府にそのとき入っていない人たちが非常にパイプ役を務めていて、政策をかなり促したと思う。2000年から私は同じようなものが今必要と思った。つまり再び沖縄の将来を語る、今度は京都ではなく沖縄で沖縄会議をやるべきだったんです。ちょっと残念ながらまだ実現していないんですが、特に普天間の返還後、沖縄の将来を語るが必要かなと思っていました。あと佐藤総理の話ですが、ちょっと批判的なニュアンスで申し上げたと思うんですが、彼のすばらしいと思うところは、いろんな情報を掴もうとしていた。例えば彼の個人秘書が新聞記者出身、産経新聞の記者、楠田実先生だったんです。大浜信泉先生が沖縄関係のブレインだったんです。そして核問題は違う人、外交問題だったら違う人、外務省に依存せずい

ろんな情報を集めようとしていた。当時の外務省、今もそうかもしれないんですが、非常に保守的というか、慎重に交渉したり、あるいは対米交渉を行っていたんですが、かなり行動を控えていたと思う、60年代は。佐藤総理はもう少し大胆に考えていた、外務省と比べたら。彼が大胆に考えるようになったのは、1つは政治家ですので、そういう目で見ている。もう1つは、やっぱりそういう人脈を持っていたから、何が可能か、何が可能ではないのか、よくわかっていた。ちょっと今はそれが日本政府が苦しんでいるところではないかと思う。そんなに人脈がない。大きな視点をもってなかなか決断しづらい面があるかなと思うんです。だから歴史家である私は歴史から学べるものを常に探しているの、皆さんがもし参考になったらうれしく思います。どうもありがとうございました。

●質問者（教員）

2つ質問いたします。この硫黄、小笠原は軍事的に非常に大事なところだと話で聞いていますけれども、沖縄の基地の一部を向こうに移す可能性というのはあるのかなのかというのが1つです。もう1つは、沖縄、小笠原、硫黄島返還はヤルタ協定と関係があったのかなのかという2つを質問したいと思います。

○ロバート・D・エルドリッチ

後者の御質問はヤルタ協定とは特に関係はないと思うんですが、カイロ会談とはやっぱり日本の領土は何かという相当議論はしていたんです。これは本の第4章でどのような議論があったのか詳しく書いてありますけれども、基本的に国務省の考え方は施政を持っていた島、まあ台湾はちょっと別ですけども、従来日本の領土である、19世紀半ばから既に日本の領土であるという立場だった。でも軍はそれを非常に、国際法で言えばそれは賛同するかもしれないんですが、戦略上は別の話だったんです。本来ならば国務省は小笠原諸島は日本の一部であるという立場をより強く言うべきだったと思うんです。つまり沖縄、南西諸島は国務省は非常に強く国防総省に対してそれを言ったんですが、南方諸島に関してはもう少し慎重的というか、あまりそれほど強く言わなかった。理由は2つだった。1つは人口が非常に少ない。もう既に44年に日本軍によって引き上げられたので、人がいないし、そもそも少ないから別に日本が大きな問題にしないだろう。もう1つの理由は、太平洋の中部地域には非常に近いので、もし日本がそこに再び配備して、もし軍隊を持つようになっ

たら、中部、グアム、サイパンとか、そのあたりが危なくなるという軍寄りの立場をとるようになったんです。ですので、その点では沖縄と小笠原に対する見方が若干違っていたかなと思います。あと移れるかどうかということだけど、これは普天間の話ですか。

● (質問者)

それは可能性としてあるんでしょうかということです。

○ロバート・D・エルドリッチ

ないと思います。ないと思いますが、150%はそれは言えると思います。空軍が当時持っていたのは固定機、それが立川との間だったんです。海軍が持ったのは潜水艦、海兵隊は潜水艦を持っていないから、それが多分そこには任務が違う、役割が違うから。

○司会

申し訳ありませんが予定時間がきてしまいました。先生はメールも日本語で全く大丈夫ですので、質問等を受け付けてくださるそうです。

先生きょうはどうもありがとうございました。

(閉 会)